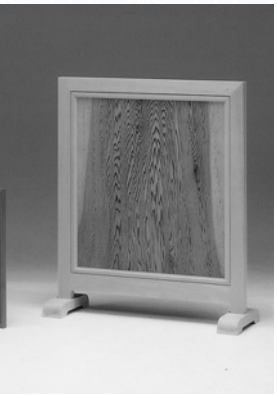
夢追い人の世界

野中建具店

（県版）現代の名工 野中 貞雄さん（69）



昨年の中頃、八十歳前後の老人が野中さんを訪ねてきた。何でも沖縄からやってきたという。

「で、ご用件は何でしょうか？」

「あなたの建具を是非自分の家に据えたいのです…。」

その老人は、野中さんを取り上げたNHKの番組「九州の匠」を見、感動して、訪ねてきたのだ。

粋に感じた野中さんは、沖縄まで何度も往復して、最高のモノを提供した。完成したのが、ついこの前の十一月中旬である。

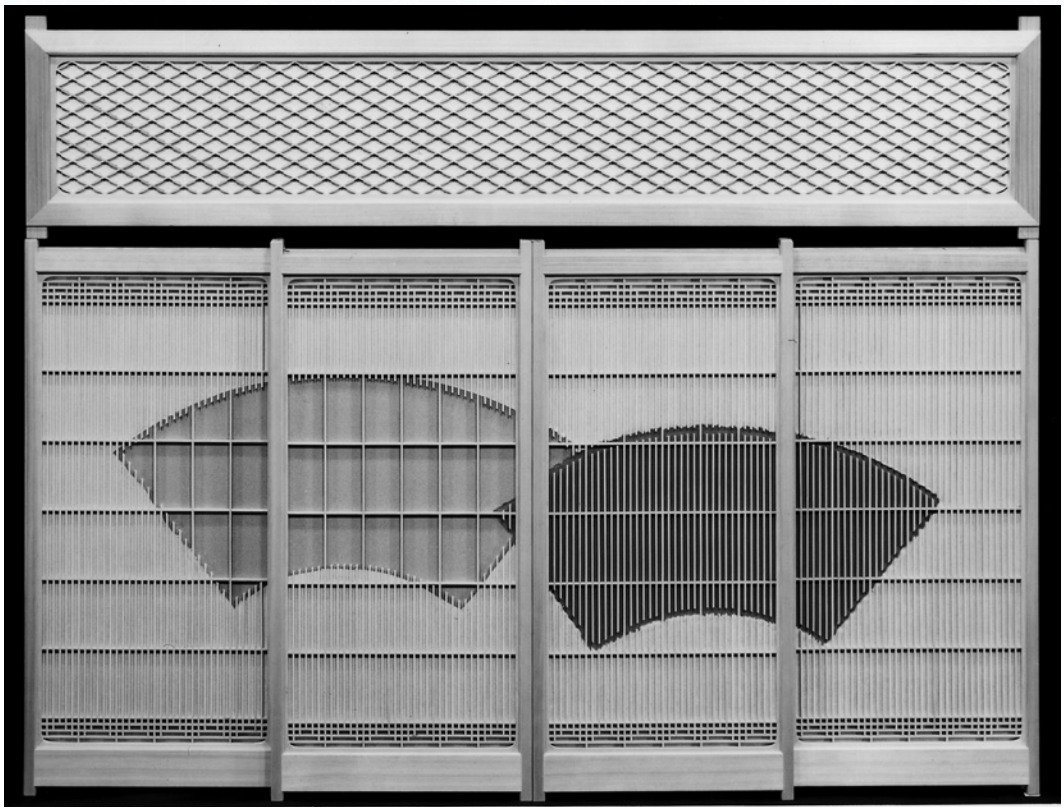
十一月二十八日には県庁で知事から県優秀技能者の表彰を受けた。今年度の県優秀技能者（県版「現代の名工」）二十九人の一人に（うち女性二人）に選ばれたからだ。この賞は、長年「その道一筋」に技を磨き、独自のたくみの世界を築いた職人さんに贈られるものである。

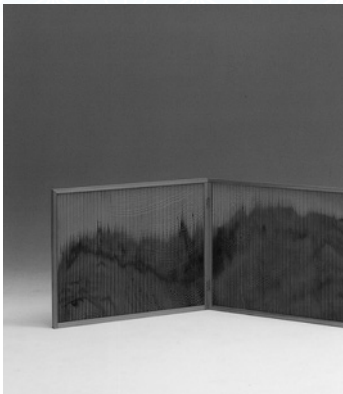
確かに野中さんは昔気質の職人で、ご自身「自分は商売人にはなれない」と語る。従ってカタログも作らない。知人が何度もそうするよう勧めても、首を縦に振らない…、といっても、いかめしい頑固一徹といった感じではなく、温和で笑顔が魅力的な方だ。

野中さんの作品には気品がある。組子の高度な技法、全体と各種の組子模様とのバランス、そして素材の違いによる色合いの妙が絶品である。大変美しい。

素材には、けた違いのこだわ

「その道一筋」、独自のたくみ





組子の高度な技法、全体と各種の組子模様とのバランス、そして素材の違いによる色合いの妙が絶品。

りがある。こんなエピソードがある。「三十歳以降、最高の素材を求めて、日本各地を歩きました。」なぜだろうか。「当時の大川市にもそれなりの素材が出回っていましたが、満足できなかったからです。」こうして見いだしたのが、秋田県能代の秋田杉、長野県のさわら、木曽の檜、高知の土佐杉、山口県吉川家の檜、などである。これら良質の素材でこれまで秀麗な作品を作り上げてきた。

ところが、昨年の一月アクシデントがあった。脳梗塞で倒れたのだ。三か月入院し、そのリハビリに励んだ。当時は言葉も出なかったそうだが、今ではほぼ以前の状態に戻った。

現在力を入れているのが、組子技術を生かした、工芸品の製作である。「これまで捨ててきた端材をいかに取り込むか」に、心を尽くしている。七十歳近くなった今でも技術の進歩、改善に努めている。やはり根っからの職人さんなのだろう。

弟子の育成にも熱心。これまで三十人の弟子を育ててきた。現在は二人が修行中である。住み込みで家族同様に扱う。弟子との絆は深い。毎年正月の七日、弟子たちが全国から集まってくる。今年も野中さんはその団らんを楽しみにしている。